

第6回「友の会ウィーク」 様々なイベントを開催

「図書館をひろげる 図書館からひろがる」をテーマに葛飾図書館友の会は11月8日(土)から24日(月)まで、第6回「友の会ウィーク」を開催しました。ウィーク期間中、中央図書館で友の会の各委員会及び参加団体により20のイベントを行いました。土・日を中心に講演会・セミナー、映画会、コンサート、読書会をはじめ、演劇、おはなし会や紙芝居、マジックショー、手袋人形の作成、音訳活動の体験など内容は盛り沢山。今号ではこの「友の会ウィーク」を中心に特集します。

友の会ウィーク

11月15日(土)

“よりよく生きる” 母親から教えられた「学び」の意味

特別講演会「学びのあかり～夜間中学からすべての人へ」松崎運之助氏

「あいうえお」は「あい(愛)」から、「いろはにほへと」は「いろ(色)」で始めるなんて、昔の人はよく考えたものだ、偉いねー！

夜間中学には、貧困や差別などさまざまな事情によって義務教育を受ける機会すら恵まれなかった中高年者も集まってくる。しかし、平仮名から学ぶ授業風景のそこかしこに、生徒たちの人間模様がいきいきと浮かび上がる。

「母」という漢字の二つの点々は、松崎先生はおっぱいだって教えてくれたけど、それは違うよ。おかあさんの涙……。わたしにはそう見える。

そんな発言がきっかけになって、生徒それぞれが自身の母親への思いを語り出す夜の教室。「いい授業だった」と振り返る松崎氏。

三十余年にわたって東京下町エリアの夜間中学の教師をつとめた松崎氏には、生徒たちとの出会いや一人ひとりの物語をつづった『学校』(幻冬社文庫/葛飾区立図書館所蔵)ほか多数の著作があるだけでなく、自身の体験が山田洋次監督によって映画化され、1993年に日本アカデミー賞の最優秀作品賞をはじめ計7部門で受賞した名作『学校』(DVD/葛飾区立中央図書館所蔵)が誕生したことも知られている。この『学校』では、松崎氏がモデルと思われる担任教師役を西田敏行が演じている。松崎氏の風貌はむしろ痩身に背筋がピンと伸び、ルックスこそかなり異なるが、懸命に生徒たちに向き合う姿勢や「イノさん」(映画では田中邦衛)をはじめとする生徒たちのエピソードは映画の中にしっかりと生かされている。

わかりやすく、どこか人なつっこい松崎氏の語り口に引き込まれて、笑いあり涙ありの夜間中学の授業風景に接するうちに、「そもそも人はなぜ学ぶのか、学ばなければならないのか」という根本的なテーマが理屈ではなく、まさに「よりよく生きる」とことと不可分の行為として、聞き手の中で噛みしめられたのではないかと思われた。

終戦の年に満州に生まれた松崎氏自身も貧しい家庭に育ち、働きながら高校・大学の夜間部で学んだ経歴をもつ。とくに、満州から多数の犠牲者を出した筆舌に尽くしがたい苦難の中を命からがら引き上げてきた後、三人兄妹を女手一つで育て上げ、守り抜き、苦労の中で人生を終えた母親、学びとは自分のためにではなく、「生かされた命」を多くの人々の幸福のために役立てるためにこそするものである、と母親の人生から教えられたと強調するくだりでは、講演会場の四十人近い参加者のほぼ全員がハンカチを取り出して聴き入っていた。

松崎氏の最新著作『路地のあかり』(東京シュレー出版)の表紙には、長崎の夜の橋のたもとで街灯に照らされながら母親の仕事帰りを今か今かと待つ松崎少年と兄妹の「苦しくとも幸せだった」かつての姿が、松崎氏自身の手で描かれている。

夜間中学退職後の今も松崎氏は、不登校児童生徒や不当な境遇で苦しむ人々のために東奔西走する日々を送る。松崎氏の今後の健康、ますますの活躍を願わずにはいられない。



(川島イベント委員会委員長)

小保方さん問題の背景をさぐる

第6回友の会ウィークの特別セミナーとして標記テーマの講演会を平成26年11月8日（土）午後2時～午後3時半に中央図書館で開きました。小保方さんの不正論文の問題は図書館利用者にとって大変関心の高いテーマだったらしく、講演後には参会者による悲憤慷慨の議論が展開されました。たとえば次のようなご指摘がありました。

- 1 小保方さんだけを悪者にして、彼女の指導教員、共同執筆者、そして所属機関の責任をうやむやにするのは間違っている。
- 2 マスコミは調子の良い時だけおだてあげて、いったん水に落ちると全力でたたくという無責任な体質がある。
- 3 日本の研究者が海外に流出してしまわないかと心配だ。
- 4 論文のねつ造や剽窃は、今後ますます増えるのではないか。

「彼女だけが悪いのか？」という問題意識が今回の講演会のキーコンセプトでした。たんに研究倫理の欠如を叱れば済む問題ではありません。小保方さんだけでなく約2万人の若手研究者が定職も得られず、そして当然指導も不十分なまま研究を続けています。またノーベル賞を獲得するほどの研究者が自らマラソンに出場して寄付金を集めるという誠に申し訳ない環境で研究をされています。高等教育機関への公財政支出はGDPの0.5%しかなく、先進諸国の中で最低の水準です。

研究をとりまく環境と社会システムの根本的な解決なしに、対症療法を重ねたところで問題は解決しないでしょう。今日の日本の研究者が置かれている困難な状況を、いくらかでもご理解いただけたのではないのでしょうか。

最後に、高橋副会長より友の会の活動紹介と友の会への参加を呼び掛けて講演会を終了しました。

講師：朝野熙彦（中央大学大学院教授、葛飾図書館友の会会長）



<友の会・映像文学館> DVD上映会「漂泊の俳人・種田山頭火」



11月24日（月）の暖かな午後、友の会ウィーク参加イベントの一環として、自由律俳句の旗手種田山頭火の生涯を綴った映画「漂泊の俳人・種田山頭火」が上映されました。DVD全三巻一挙上映と言う企画に賛同された方が多く、しわぶき一つない中央図書館の会議室は静かな熱気に包まれて、この催しは友の会ウィークのフィナーレを飾ることが叶ったと言っても過言ではないでしょう。現存する貴重な資料や写真、ゆかりの地、関わった人物の紹介などにより、山頭火の人生を映像として追体験する試みは、美しい映像や、米倉齊加年さんの名句朗読、そして秋山士郎さんのナレーションによって見事に造形された様々なアングルから「山頭火の人生の意味」を検証。充実した180分でした。

山頭火は本名種田正一。1882年山口県に生まれています。彼が10歳の時に実母が死去。この経験は山頭火の生涯を貫く一大痛恨事になったと、後年彼は述懐しています。早稲田大学に学ぶも中退。長じて妻帯するも離縁。酒と句会に明け暮れた彼は1925年に出家。耕畝（こうほ）と改名。爾来「行乞」（ぎょうこつ）一即ち家の門口に立ち、鉢の中に金銭や食べ物の布施を受けて生活。「行乞記」と言う日記をしたため、友人の医師木村緑平に送付してもあります。山頭火は本州、四国、九州を流浪。「歩かない日は、酒がない日は、句がない日はさびしい」と口の端にのせたのです。彼は荻原井泉水（おぎわらせいせんすい）に師事し、同人誌「層雲」により、自由律俳句の高峰を模索しました。同門で山頭火と並び称された俳人に尾崎放哉（おさきほうさい）がいますが、山頭火の俳句の特色は句を観念的によむのではなく「身体の中から吐く」。歩くリズムと言葉のリズムが自然の中で一体化している、と、これは村上護さんの指摘です。美しい日本の自然に反応して句をよむ。俳句のためには人生をも犠牲にした、と言う一面も見られましたが、彼の残した句は燦然たる光芒を放っています。「誰にも迷惑を掛けずに死にたい」と言う念願のように、彼は「コロリ往生」を遂げます。松山の「一草庵」にて死去。享年58歳でした。単行本句集「草木塔」を刊行した年、1940年のことです。「素晴らしい」「このような企画を又」と言った参会者の声。今後の「友の会」の活動にも励みの出るエールでした。

「クラシック・クロスオーバー」CD・DVDコンサート

11月23日（日）に催されたCD・DVD委員会による第32回コンサートのテーマは「クラシック・クロスオーバー」。クラシックをポップスにアレンジしたボーカル曲と器楽演奏による原曲を聴き比べるという試みでした。

曲目は「タイスの瞑想曲（マスネ）」「白鳥（サン・サーンス）」「カノン（パッヘルベル）」「アランフェス（ロドリゴ）」「ノクターン（ショパン）」「ジュピター（ホルスト）」「悲愴（ベートーヴェン）」などなど誰もがどこかで聴いた名曲。三人の歌姫（ディーヴァ）、本田美奈子、サラ・ブライトマン、平原綾香の歌は持ち味に応じてそれぞれ、甘く優しく語りかけ、澄んだ声はどこまでも伸び、大胆な編曲でパワフルに歌い上げ、続くクラシック演奏もオリジナルの力を再認識させるものでした。

コンサート毎の演目や演奏者に対する好みは人さまざまですが、今回途中退席される方もほとんどなく、きたえられた「人の声」の素晴らしさと原曲の魅力は聴衆の皆さんにも好評だったようです。

＝おはなしくらぶによるおはなし会＝ ろうそくを灯し素話、絵本、手遊びなどでほっこりした時間



11月には毎年、いつもの第1土曜日のおはなし会以外に、「友の会ウィーク」のおはなし会を企画！なるべく多くのメンバーが参加できるように、今年は11月16日(日)に開催しました。

今回のプログラムは、日本の昔話に始まり、おとなもぷっと吹き出すような絵本、食欲の秋にぴったりな、美味しそうな食べ物の手遊びやお話、迫力ある大型の絵本など、おとな13人こども18人が、ろうそくの灯された「おはなしのへや」で、ほっこりした時間を過ごしました。

おはなし会終了後には、お母さんと一緒に、続けておはなし会に来てくれた女の子のカードのスタンプが12個でいっぱいになり、表彰状を渡してみんなで拍手！！そんな微笑ましい1コマも見られました。

今回は、「おはなしくらぶ」の主要活動メンバー紹介をしたいと思います。

◇ウサギさん…ボランティア歴は3年半。小学校で読み聞かせをしている現役ママさん。ほんわかした雰囲気でお話を読んでいます。友の会ウィークの素敵なプログラムも作成！

◇ネコさん…ボランティア歴2年。ねこさんもお子さんの小学校で読み聞かせをしています。ネコさんが選ぶ科学絵本は、おとなもへっと感心することしばしば。ときどき手遊びにも挑戦！ピップホップダンスも大好き！

◇リスさん…ボランティア歴6年。絵本読み担当。外国の作家さんの絵本をよく選びます。ときどき「おはなし会」の音楽(ギター)も担当！普段は、外国(英語)の児童文学を翻訳する仕事をしています。

◇ウシさん…ボランティア歴10年。季節ごとのたくさんのお話を引き出しから、楽しい日本の昔話を語っています。水墨画や俳句など、モ〜多趣味！

◇サルさん…ボランティア歴5年。素話と絵本読みの担当です。時々手袋人形にも挑戦！お料理、コーラス、大江戸玉すだれまで、多芸の持ち主！

◇フクロウさん…ボランティア歴5年。朗々とした声で読むフクロウさんの昔話絵本は本当に素敵です。朗読の会でも大活躍！

◇スズメさん…ボランティア歴3年。主に、素話と絵本読みを担当していますが、素話が大好き！他にもボランティア活動をしなが、習い事も始めたい、もっと本も読みたい、といつも好奇心旺盛でアクティブ！

◇ウマさん…ボランティア歴16年。定例の「おはなし会」は仕事で参加できないことが多くて残念、ときどき手遊びやわらべうたを担当しています。子どもの笑顔が、なによりのごほうび！

(児童サービス応援委員会)

児童サービス応援委員会主催

かわゆい指うさぎが誕生 ハッパのかげからこんにちは… 手袋人形を1時間半で完成

児童サービス応援委員会の「おはなしくらぶ」主催による“おはなし会に役立つ手袋人形を作ろう！”が11月12日(水)午前10時から開かれました。参加者は友の会会員を含め8名、裁縫道具を持参して白と緑の軍手で手袋うさぎにトライ。用意されたキットを使って、まず耳の白いフェルトの上に同じくピンクのフェルトで作った小さい耳を貼り合わせます。白い軍手の指先にパンヤを丸く詰め、頭の形を作ります。目はビーズを使用。赤い刺繍糸で口をつけます。

参加者は図書館の児童室職員の指導を受けながら楽しそうに作業を続けます。そして頭に耳を、首には毛糸のリボンをそれぞれ接着剤で貼り付けると、かわいいうさぎが誕生。最後にチャコでほっぺにほんのりとお化粧すると、1時間半で元気な五つ子が完成です。

参加者は生まれたばかりの子うさぎの手袋をはめ、左手につけた緑の手袋で隠し、今度は実技の練習へ。中田喜直の作曲した“ヒヨコがね”の「かわいいかくれんぼ」の替え歌を歌いながら緑の指の間から草に隠れたうさぎが顔をのぞかせたり、隠れたりする様子を演じました。この指人形はどこかのおはなし会できっと子どもたちの人気者になることでしょう。



プロフェッショナル区民劇団<Katsushika H.A.M>公演 11/9(日)

若手俳優陣の熱演に大きな拍手沸く

「友の会ウィーク」に6年連続して参加している劇団H.A.Mは友の会会員 坂 修一さんが主催する、れっきとしたプロの演劇集団。H.A.Mとは「大根役者」という意味もあるようですが、どうしてどうしてセリフも動きも本物の舞台です。今回は「若手発表会」というサブタイトルで5人のメンバーがまず朗読劇『わたしのカレーライス』というシニカルなコミックものの1幕と昭和初期の名作、岸田國士の1幕劇『屋上庭園』を熱演しました。「屋上庭園」というドラマはデパートで再会した元学友の2組の中年夫婦が、貧富の差によって生ずる夫・妻それぞれ心理的葛藤を、昭和初期の風俗の中に再現する作品で、男性上位時代を反映したセリフがやや難解でしたが、名作の味は十分伝わったようでした。

友の会ウィーク期間中、事務室前の展示コーナーでは展示企画委員会により参加団体及び友の会委員会が開催するイベントの各種ポスターや委員会の活動を紹介するパネル・写真などがボードに掲げられました。

またガラスケースの中にはこの1年間に発行された「友の会通信」のカラー原版や2ヶ月に1回開催されているキーワード読書会で紹介された本のリスト、さらにはCD・DVDコンサートのプログラムのカラー原版も陳列されました。興味深そうに覗き込む来館者も時々おられました。

なお、この「友の会ウィーク」には下記のボランティア団体が参加しました。

- ①「紙芝居サークル飛行船」②「柴又語りの会」③「おはなしたまごの会」④「青い鳥」⑤「ザ・マジック」⑥「虹」⑦「あおぞら」⑧「葛飾音訳ボランティアの会」⑨「Katsushika H. A. M」



「葛飾図書館友の会」ボランティア活動報告

理科大での本のリサイクル市に協力

開始前から長蛇の列、なんと1日目の昼過ぎには終了

葛飾区新宿にある東京理科大学の大学祭に合わせて、本のリサイクル市が開催されました。区内図書館から提供された書籍や図書館への寄贈本など約4千冊のリサイクル本が無料でゲットできるこのイベントに「友の会」会員が会場誘導・案内などに協力しました。11月22日（土）午前に階段教室の会場へコンテナによる搬送を完了。翌日午前10時からの開始前には既に多くの方々が並んでいました。その後も長蛇の列が絶えることなく、百人以上が順番待ちという状況に。教室の壁に沿って並べられた本をお持ち帰りというこのリサイクル市は2日間予定されていましたが、延べ2千名近くの方々が来場されたとのこと。1日目の昼過ぎにはほぼ本がなくなり、好評のうちにあっという間に終了しました。

★★★★★★「葛飾図書館友の会」で一緒に活動しませんか！★★★★★★

『友の会』は多くの会員によって活動しています。図書館を利用されている方、活動趣旨に賛同される方々、是非ご入会いただいて、あなたの図書館に関わるいろいろなアイデアを少しずつ実現してみませんか？

原則として第3土曜日の午後1時から4時まで中央図書館内で、また友の会の開催イベント時でも直接の入会受付を行っていますので、是非ご利用ください。年会費は一般会員1,000円、賛助会員は1口2,000円です。上記の方法が利用できない場合、入会希望者は中央図書館に入会届をご提出の上、年会費を下記の口座に納入してください。図書館での年会費の直接納入はできません。「通信欄」に一般あるいは賛助会員かを明記の上、26年度年会費とご記入下さい。また1口

ゆうちょ銀行	口座番号	00100-7-392065
	口座名称	葛飾図書館友の会

500円の寄付も大歓迎です。払込手数料は窓口では130円、ATMからでは80円です。恐れ入りますが、ご負担をお願いいたします。入会届はHP (<http://katsutomo.jimdo.com/>) からダウンロードできます。

●問い合わせ先 中央図書館友の会担当者（打越さん、吉村さん、白井さん、川井さん）Tel 03-3607-9201

色えんぴつ

図書館には書籍や資料などに加え、音楽や映像資料としてCDやDVDがある。毎月1回、友の会はナイトシアターやコンサートを開催して来場者と一緒に楽しんでいる。CD・DVDコンサート委員会は企画・選曲に際し、区内の図書館所蔵のCD、DVDを探し、事前に視聴する。しかしCDの裏面は傷だらけのものが多く、最悪の場合は音が飛んでしまう。古く、利用頻度も多いものは利用者がたまたま誤ってキズをつけてしまうこともある。故意ではないと信じていた。だがキズによってとは明らかに乱暴に取り扱った結果と思われるものも。怪我をしていてCDを図書館に研磨してもらっているが、治療しても回復不能のものも出てくる。コンサート本番時、途中でトラブルが起これないかと冷や冷やしたものである。特に音楽での音飛びは興ざめで、当日までの努力が水泡に帰してしまう。書籍はシミ・汚れはもちろんのこと、水ヌレが最強の敵だそう。雨で濡らしたり、飲み物をこぼしたり、いわんや風呂に入りながらは絶対に避けなければならぬ。切り取ったり、書き込んだり、線を引いたり、ページに折り目をつけたりなどは言語道断、モラルの問題である。次の利用者が気持ちよく楽しめるマナーを常に心がけたい。

（中里広報委員）